

## 高齢者医療は過剰サービス？

浜田 道雄

もう十年以上も前のことだが、小田急線の鶴巻温泉駅に近い丘の上に住んでいたころ、わが家から里山の尾根伝いに秦野市の弘法山までの山歩きを日課としていた。

弘法山公園にはその近くに住む老人たちが運動のためにと毎日たくさん登ってきて、公園や山道の清掃ボランティアなどをしていた。それで、私も自然と彼らに交わって清掃作業などを手伝うようにもなったのだが、そのなかで私より十歳あまり年上のMさんととくに親しくなった。彼は秦野市では地域社会の指導者として知られる人であって、このボランティア活動のリーダー的存在でもあった。

ある日清掃作業が一段落したあと彼と雑談をしているうち、Mさんが「多くの病気を抱えていて、毎月五つの病院に通って十種類の薬を貰い、毎日それを飲まねばならない」ことを知った。これには私もびっくりして、「この爺さん、こんなに元気なのに変な趣味を持っているな！ 本当に病気持ちなんだろうか？ 病院通いはともかくとして、そんなに沢山薬を飲むなんておかしいよ」と呆れたのだった。

それから十余年、Mさんと同じ年頃になった私は、気づいてみると彼と同じような病院マニアになっていた。いま私は四つの病院に一〜三ヶ月に一回通っている。三度も手術した食道ガンの経過観察のために一ヶ所、メニエル症は別の病院へ。そして高血圧のために近くのクリニックへ、さらに白内障でやはり近所の眼科医院だ。貰う薬は全部で七種類。これらを毎日何回か飲み、点眼もしている。私もMさん同様、立派な「おかしい爺さん」なのだ。

ところで、処方される薬を調べてみると、どれも私の病気の原因をなくす「治療薬」ではない。単に症状を悪化させないためだけの薬だ。高血圧の薬は血圧を下げる効果し

がなく、弱ってきた血管を強くしてくれるわけではない。飲んでいけば弱っている血管にかかる負担が少なくなるから、血管が破裂して寝たきりになったりあるいは死んだりする危険がすくなくなるといっただけだ。したがって「死ぬまで」飲み続けなければならぬ。メニエル症の薬も同じ。身体がふらつきを抑えるだけで、メニエル症が治るわけではない。メニエル症で低下した聴力が元に戻るわけではないのだ。

こうしてみると、私が受けている老人向けの医療とは何なのだろうかと考え込んでしまう。医療は人の病気の原因を取り除き、健康を取り戻しさらには増進させるための技術だと思っていた。しかし症状を抑えるあるいは進行を遅らせるだけの治療となると、それは私の健康の回復、増進にはなにも積極的な意味はもっていない。たんなる気休めとどこが違うのかなどと疑ってみたくなる。

私はすでに八四歳、日本人男子の平均寿命は超えてしまっているから、これからの私の生きる時間は「人生の余得」だ。特別長生きしたいなど思ってもいない私にとつて、こんな「余得」はほしいわけではない。老人医療費が社会的に大きな負担になっている今日このごろを考えれば、こんな老人医療や投薬は老人に対する「過剰なサービス」ではないのではないか。そんなふうに思ってしまう。

とはいえ、貰った薬を飲まずに高血圧のままでしたら、いつか脳溢血をおこしてすぐ死ねばともかく、寝たきりになるかもしれない。そうすると、家族には相当な負担をかけることになるだろう。そう思うと、やっぱり貰った薬は飲まなければならぬか？ 「過剰サービス」だなんて悪口をいわないで、おとなしく黙って飲むべきなのか？ 迷いながら、結局は医者に貰った薬を毎日飲んでいく。

それ「To be, or not to be?」の心境である。